

「踏み出す勇氣」

昭 4 8 年卒 経営 浅田 恭正

就職活動説明会

六甲台就職相談センターでは、毎年、これから就職活動を始めようと思っている 3 年生、M1 の学生を主たる対象として「就職活動説明会」を開催していますが、その参加者数を振り返ってみます。

平成 22 年に法学部の学生を対象に開始しましたがその時には 150 人の参加がありました。翌 23 年には法学部に加えて経済学部、国際協力研究科でも個別に開催して総計約 200 人の学生が参加し、その翌年からは経営学部も加わって約 250 人の参加となりました。しかし 27 年には各学部の参加者が 50 人を切るようになったため、28 年からは学部合同で開催しましたがその後、参加者は増えていません。

危機意識の変化

参加者が減少してきた理由は次の 3 点にあると思われます。

一点目には就活情報、ツールの増加と選択肢の多様化にあります。

10 年前と比べて今は就職情報業者主催のセミナー、就活説明会が頻繁に開催されるようになりました。そしてネットでの就職関連情報が増えてきています。さらには就職紹介業者が就活生に対して、内定者であるメンターを通して就職相談に応じるというやり方も現れてきています。このように就活生にとっては参加しやすいセミナーやツールが増えてきているのです。

二点目に雇用環境の改善が挙げられます。

10 年前はリーマンショックに端を発した世界金融危機が勃発して、各企業は採用数を絞り、就職活動は買い手市場となりました。当時の就活生は就職活動に危機感を抱き、早めに就活に取り組もうという意識が働いたのです。しかしその後、雇用環境は改善され、ここ数年、コロナ前には超がつくほどの売り手市場と言われてきました。

その結果、三点目として学生の意識の変化が挙げられます。

学生の切迫感、危機意識は後退してきています。さらには、ネットから簡単に就職情報の収集ができるようになった結果、安易に就活のノウハウやマニュアルを求めようとする傾向が顕著になってきています。

いつも言っていますが、就活はマッチングであり、自分にとって何が正解かはわかりません。自分自身の就活は、他者の力を活用しながらも、あくまで自分で考え抜いて、自らの

方向を見据えて進んでいかなければなりません。しかし今の就活生を見るにつけ、就活に対する取り組み姿勢が安易に流れ、切迫感、危機意識の後退につながってはいないかととても心配しています。

一方、六甲台就職相談センターに相談に来訪する学生の中で、3年生からの編入生の数が最近増えてきているという実感があります。その学生は絶対数だけでなく、リピート回数も増えています。この現実はいつに編入生の就活に対する危機感の表れではないかとみています。

編入生はこれまでの大学生活を振り返って一番力を入れたことは明らかに編入のための勉強ですが、そのことをいわゆる「学ちか」でアピールしても自分の売りとしての説得力としては少し弱いと思います。また、特にコロナの影響で編入後の3年生でクラブやサークル活動といった学業以外の大学生活が制限され、どのような学生生活を送ってきたかをアピールできる材料が極めて乏しいのです。このことは編入生以外にも当てはまります。

そんな現状に直面した編入生は危機感をもって入学後すぐにセンターを訪ねてきます。そこから我々相談員と二人三脚で就活準備を進めていくのです。そしてインターンシップやセミナーにも計画的に参加して自分の方向を見定めていき、当センターの相談員から就活の具体的なアドバイスを受け、さらには企業、仕事に関する話を何度も重ねていく過程で成長していきます。その結果、自らの職業観、仕事観を明確に自分の言葉で語るできるようになり、早期に内定を取ることに繋がっているのです。

一方で就活に取り掛かるのが遅れ、自己分析、企業研究が不十分な状態で、企業選び、仕事選びの軸があいまいなまま活動を進めていった結果、すべてが後追いとなり、焦りと不安を抱えて就活を進めていかざるを得なくなった学生が多くいます。

踏み出す勇気

前段で編入生を例にとって述べましたが、私が声を大にして就活生に訴えたいことは、危機感を持って、できることから早期に行動に移して行ってほしいということです。会社に入って求められる「就業力」は「考え抜く力」と「他者と関わりを築く力」そして「一步踏み出す力」です。

就職活動においてもその一步が先になって「ワニの口」となり、大きな差に広がっていくのです。これからの社会人としての進路を決める大事な時期に、後から振り返って遅かったと後悔しないよう、今こそ「踏み出す勇気」を持って行動に移して行ってほしいと願っています。そのために一日でも早く六甲台就職相談センターの門をたたいて相談員と一緒に就活を進めていきましょう。

以上